

京都国立博物館所蔵の宝塔について

登谷伸宏

はじめに

京都国立博物館には、日蓮宗四大本山のひとつである京都本圀寺に伝来したといわれる、小規模な木造宝塔が所蔵される（以下、館蔵宝塔とする）（挿図2・10）。館蔵宝塔は、仏像や経典を安置する厨子として用いられたと考えられ、細部に至るまで非常に精巧にくられている。だが、その存在は、『京都国立博物館蔵品図版目録彫刻・建築編^①』に紹介されるなど以前から知られてはいたものの、学術的にはほとんど注目されず、歴史的、美術的な価値については未だ評価が定まってい^②ない。そこで、本稿では、館蔵宝塔の特徴を明らかにし、その価値を改めて解明していくこととするが、その際に注目したいのが、建造物としてみた館蔵宝塔の特徴である。

古代以来、日本では建築模型や厨子など小規模な木造建造物が数多く製作されてきたが、それらのなかには、屋外に建てられた建造物と構造や意匠の点でほとんど変わらないものも多数存在する。館蔵宝塔も、厨子として製作されたためか内部の構造は省略されるが、

組物など外部に現れる部分は屋外の建造物とほぼ同様に作られており、建造物として評価することも十分可能だと考えられる。

また、現在、館蔵宝塔のような木造の小規模宝塔の遺構としては、重要文化財の指定を受けている性海寺宝塔（弘安四年（一二八一）頃、愛知県）と長藏寺舍利塔（天文十六年（一五四七）、岐阜県）、京都府指定有形文化財となっている妙覚寺華芳宝塔（室町時代後期、京都府）などがあるが、現存遺構の総数は非常に少ないと考えられる。そのなかで、館蔵宝塔は、右の宝塔がすべて中世に遡る遺構であるのに対して、十七世紀の製作とみることができ、小規模宝塔の近世的な特質を明らかにする上で、非常に貴重な事例といえることができる。

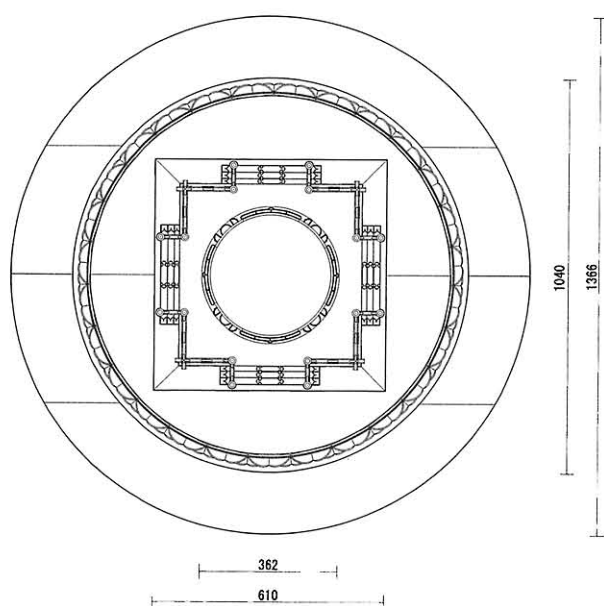
よって、以下では、館蔵宝塔の建造物としての側面に注目し、形式や構造を検討するとともに、中世の遺構を参考としながらその特質を明らかにしていくこととする。

一 本圀寺と館蔵宝塔

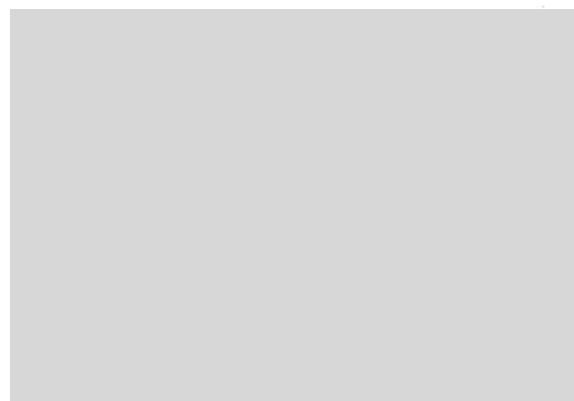
館蔵宝塔は、中村庸一郎氏が京都国立博物館に寄贈されたもので、京都本圀寺に伝来したといわれる。

本圀寺は、妙龍日静を開基とする日蓮宗寺院である。南北朝期以降、京都における日蓮宗の中心的な寺院として勢力を伸ばし、堀川六条に広大な寺地を有した。戦国期には寺地の周囲を要害化し、寺内に寺内町を形成していたことは周知のことである^③。天文法華の乱にともない、教団は一時期京都を追われたが、まもなく帰京し伽藍の復興に努めており、天明の大火（天明八年（一七八八））により伽藍の大部分が焼失するまでその偉容を保っていた。各堂舎の造営は『本圀寺年譜』^④に詳細に記録され、それぞれの造営時期や過程を追うことができる。また、焼失前の堂舎の配置や境内の景観を描いた絵画史料も残されており、堂舎の位置や境内の空間的な特徴を把握することができる^⑤。その後、近世後期以降は寺運が傾き、天明の大火後は大方丈を本堂に充てるなど堂舎の造営もままならない状態となる。さらに、昭和四十六年（一九七二）には京都市山科区に移転し、現在に至っている。

このように、本圀寺の堂舎、境内については、史料から各時期の様相がおおよそ把握できるのに対して、館蔵宝塔が本圀寺に伝来したことを記した史料はなく、その経緯を明らかにすることはできない。だが、残された史料を十分に活かせば、それをある程度まで解明することは可能だと考えられる。よって、以下ではこれらの史料にもとづき、館蔵宝塔と本圀寺との関係、および宝塔の製作年代と



挿図2 宝塔平面図（単位：mm）



挿図1 本圀寺本堂内に安置された宝塔
（『大本山本圀寺略縁記』）

用途について検討していきたい。^⑥

明治四十二年（一九〇九）に出版された『大本山本圀寺略縁記』^⑦

（以下、『略縁記』とする）に所収された本堂内部の写真には、館蔵宝塔と非常によく似た宝塔が写っている（挿図1）。写真自体があまり鮮明でないため細部の比較はできないが、両者は、おおよその規模、円筒形の框座、反花と請花を重ねた蓮華座、基壇を備えた須弥壇に乗る宝塔という構成が一致し、この宝塔が館蔵宝塔である可能性は高いといえる。だが、その一方で、館蔵宝塔の框座は格狭間が単純な盲連子であるのに対して、写真の宝塔では格狭間に複雑な彫刻が施されている。したがって、両者は別物である、または框座のみが相違する可能性があるが、写真からはどちらとも判断できない。では、写真に写る宝塔は、どのような用途に用いられていたのだろうか。それが明らかとなるのが以下の史料である。

【史料一】『略縁記』

本堂上段の間 床の間及び襖の孔門十哲の画は狩野法眼永徳の筆にして、内地人及び外国人の美術家の賞賛せざるものなし、又襖の背面には帝室技芸員岸竹堂なる竹林七賢の図なり、右方の宝塔は水戸黄門光圀公寄附なる法華懺法の塔にして、例年十一月十四日には同公及び母堂菩提の為に此塔を宝前に飾り厳肅なる懺法会を修す、

これは挿図1の解説として『略縁記』に載せられたものだが、それによると、この宝塔は水戸藩主徳川光圀が寄進したもので、明治期には光圀とその母親の宝前に安置し、法華懺法講を修していたことがわかる。光圀が本圀寺門主であった日隆に深く帰依したことは各書で指摘される通りであり、後掲の【史料二】にあるように、本

圀寺へ仏具などを寄進していたことを考慮すると、宝塔に関わるこうした寺伝は一応首肯できる。

一方、館蔵宝塔には、後述のように各所に三葉葵の紋が用いられており、徳川家に関わる品であったと考えられる。したがって、写真の宝塔との規模や構成の類似、上記の寺伝をふまえるならば、写真に写った宝塔は館蔵宝塔であり、近世を通して、光圀とその母親の懺法講に用いられたものとすることができよう。

その場合、館蔵宝塔の製作年代の下限は、光圀の死去した元禄十三年（一七〇〇）に求められるが、上限を考える上で注目されるのが以下の史料である。

【史料二】『桃源遺事』続々群書類従（一）内は割註、（一）内は執筆、（二）以下同）

又京都本圀寺へも、御母堂の御為に、仏具及び楽器等御納め、御法事の料として、田畑御附被遊候、（異本追加）毎年十一月十四日の御祥忌日には、本圀寺にて法華懺法今に施す、

【史料三】『本圀寺年譜』貞享二年十一月十四日条

従水戸中納言光圀卿為母堂文昌院周日句大姉二十五年忌追薦懺法執行命之、従是歳以後永代修之、于今毎歳務、是月是日留守居及下役詰来時齋出之、

これらの史料からは、貞享二年（一六八五）、光圀が本圀寺へ生母谷久子の懺法講執行を命じ、それ以降本圀寺では毎年懺法講を催していること、懺法講執行のため、光圀から寺へ仏具や楽器、田畑が寄進されたことがわかる。これらから、宝塔の施入された時期は、貞享二年以降が妥当だと考えられ、製作年代の上限もその頃に求められよう。よって、館蔵宝塔の製作年代は貞享二年から元禄十三年



挿図4 宝塔上層



挿図5 宝塔須弥壇



挿図6 宝塔開口部



挿図7 宝塔内部



挿図3 宝塔全景

までの間ということとなる。

以上、館蔵宝塔と本圀寺との関係、および宝塔の製作年代と用途について検討してきた。その結果明らかとなった点として、館蔵宝塔は、①徳川光圀が本圀寺へ寄進したものである可能性が高く、製作年代は十七世紀末と考えられること、②光圀の母親の法華懺法講のために用いられたものであることが指摘できよう。史料から判明するのはこの二点のみであり、光圀が宝塔を寄進したことを示す同時代史料を欠いていること、館蔵宝塔と写真に写った宝塔とでは框座格狭間の彫刻が異なるなどいくつかの問題点は残るが、ここでは一応右のように考えておきたい。

二 館蔵宝塔の建築的特質について

これまで、館蔵宝塔の製作年代、および本圀寺における用途について検討してきたが、ここでは、宝塔の建造物としての特徴についてみていきたい。

まず、宝塔の構造形式を確認しておく。

須弥壇付宝塔 宝形造 本瓦葺型板葺（銅板で覆う）

十七世紀後期

下層円柱 切目長押 内法長押 上部亀腹 上層円柱 切目長押

台輪 尾垂木付二手先組物 実肘木 二軒繁垂木

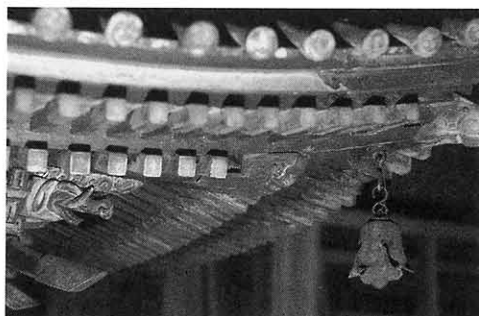
宝塔は総高が二五二cmで、うち框座高が六九・五cm、蓮華座高が四〇・五cmである。塔身胴径は三六・二cmを測る。塔身は基壇を備えた須弥壇上に置かれ、須弥壇四周には組高欄を廻す。

宝塔下層部は四本の円柱を立て、切目長押と内法長押を廻す。柱

は板壁に貼り付けられたもので、構造としては機能していない。柱間には弊軸を立て双折、両開きの板戸を吊る。内部は厨子として用いたため構造を表現せず、天井などの室内雑作も施さない。内法長押上は亀腹とし、その上に組高欄付の縁を巡らせている。塔上層は八本の円柱を立て、切目長押を廻す。柱上には台輪をのせる。柱間にはいずれも花頭窓形の板を張り付け、開口部の表現とする。組物は和様の尾垂木付二手先組物で、尾垂木には鎬をつくる。さらに、隅木方向の組物には、雲形の彫刻を施した肘木状の持送り、象鼻の持送りが上下に重なって付き、隅木を受けている。軒は二軒の平行垂木とし、垂木に反り増しはない。屋根は本瓦葺形板葺で、全体を銅板で覆う。塔の上層と下層は構造として一体にはつくられず、上層部の縁から上は取り外せるようになっている。

宝塔は黒漆塗りを基調とし、下層の弊軸、上層の高欄、台輪などに塗られた朱漆、組物に施された彩色がアクセントとなるが、この宝塔を最も特徴付けるのは、柱から建具に至るまでありとあらゆる部分を飾る飾金具であろう。飾金具には唐草文などの文様が精巧に線刻され、宝塔全体を荘厳している。このように過剰なまでに飾金具を多用する宝塔は例がなく、その装飾性は高く評価できる。さらに、下層部の内法長押、上層の台輪の八双金具に、三葉葵紋の釘隠を用いる点も注目される。前述のように、館蔵宝塔は徳川光圀の寄進と伝わるが、それを裏付けられるものとなっている。また、基壇や板扉定規縁には象嵌七宝の花菱文金具が付くが、宝塔にこうした七宝の金具を用いるのは非常に珍しいと考えられる。

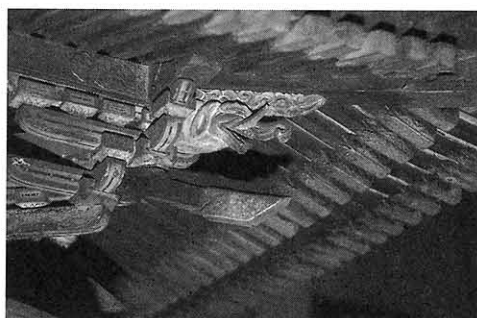
なお、現状では、組物の一手目の巻斗や通肘木が部分的に欠損するとともに、明らかに後補とみられる部材がある。さらに、花頭窓



挿図8 宝塔地隅木金具絵様



挿図9 宝塔飛檐隅木金具絵様



挿図10 宝塔隅木下象鼻

も大部分が後補である。これらのちに加えられた部材はいずれも当初材と比べてつくりが拙く、惜しまれるところである。

蓮華座は、反花、請花から構成される。全体を朱漆で塗り、蓮弁には条線を金で描く。框座は円筒形で、縦に半截できるようにつくられる。黒漆塗りで、框や束には飾金具を付け、羽目板には格狭間を設ける。格狭間はいずれも盲連子だが、この点は前述したように、『略縁記』に写っている宝塔と異なる部分である。

宝塔には製作年代を示すような特徴がなく、形式や技法から判断するのは困難だが、象鼻の表情や、地隅木、飛檐隅木先端の金具に彫られた絵様から、製作年代としては十七世紀後半が妥当だと思われる(挿図8~10)。これは、前章の検討結果ともほぼ一致するものであり、両者から、製作年代は十七世紀末である可能性が高いといえよう。

このように、館蔵宝塔は装飾性の高さに大きな特徴があるが、その他にも現存する小規模宝塔との比較から、以下のような特徴を指

摘できる。

①多宝塔は、上層部に十二本の柱を立てるのが一般的である。性海寺宝塔、長蔵寺舍利塔、妙覚寺華芳宝塔でもそうした形式をとるが、館蔵宝塔は柱を八本しか立てない。さらに、前者では切目長押、腰長押、内法長押を廻すが、後者は切目長押を廻し、柱上に台輪を置くのみである。これは、上層部の柱径を塔身径と比して大きくした結果、塔身を軽やかに見せるために柱や長押を省略したのだと考えられるが、中世の小規模宝塔と比較するとその省略が目立つ。

②多宝塔では上層の組物を四手先とするのが定法であり、現存する小規模宝塔も同様だが、館蔵宝塔は尾垂木付の二手先組物を採用している。組物を二手先とすると、四手先と比べて軒の出が短くなるが、館蔵宝塔では地垂木を長く出すことにより軒の出の深さを確保している。

③濱島正士氏によると、南北朝期頃から上層の軒を扇垂木とする多宝塔が現れるという^⑧。宝塔の事例をみると、性海寺宝塔、長蔵寺舍利塔、妙覚寺華芳宝塔はいずれも二軒扇垂木とし、現存する小規模宝塔では鎌倉後期から軒を扇垂木としていたことがわかる。その一方で、館蔵宝塔の軒は二軒平行垂木であり、これらの宝塔と比べると例外的である。ただ、近世の小規模宝塔は現存事例がほとんどないため、平行垂木とする事例が少数なのかどうかは明らかではない^⑨。

④多宝塔上層の開口部は連子窓とするのが一般的だが、館蔵宝塔

は花頭窓形の板を張り付け、開口部の表現としている。開口部を花頭窓とする事例は長蔵寺舍利塔など僅かであり、館蔵宝塔の特徴のひとつとすることができる。

以上、館蔵宝塔の建築的特質を、現存遺構との比較を交えつつ検討してきたが、この宝塔の特徴は、非常に装飾的であり、かつ塔上層部において組物や開口部に珍しい手法や形式を用いる点にあるといえる。とりわけ、中世の現存遺構では、軸部に切目長押、腰長押、内法長押を廻し、組物には四手先組物を用いるという屋外の多宝塔と同様の形式が採用されるのに対して、館蔵宝塔ではそうした形式を自在に変えており、かかる点に中世の宝塔との大きな違いがある。そして、これらの相違点からも、館蔵宝塔が近世の製作であることを裏付けられるのではないだろうか。こうした特質が、近世に製作された宝塔と比較した際にどの程度普遍性と独自性を有するのかは今後の検討課題とするしかないが、館蔵宝塔は数少ない近世の小規模宝塔の貴重な遺構であり、かつ特徴的な手法・形式を持つ点で、建造物としても非常に価値の高いものだといえよう。

〈註〉

- 1 『京都国立博物館蔵品図版目録 彫刻・建築編』京都国立博物館 一九九七年。
- 2 館蔵宝塔は、二〇〇九年に開催された特別展覧会「立正安国論」奏進七五〇年記念『日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―』に出品されており、同展覧会の図録に載せられた解説が、現段階で最も詳細なものである。特別展覧会図録『日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―』京都国立博物館 二〇〇九年。
- 3 森田恭二「中世京都法華『寺内』の存在―六条本圀寺を中心として―『ヒストリア』九六 一九八二年。

4 東京大学史料編纂所蔵。

5 天明の大火以前の境内を描いた絵画史料としては、「本圀寺境内廻り内地坪数并諸建物間数坪数書附図」、「都名所図会」などがある。前者については、つぎの論文を参照。櫻井敏雄・長池秀崇・青柳慶賢「洛中本圀寺の子院（塔頭）の構成について」『平成十三年度日本建築学会近畿支部研究報告集』二〇〇二年。

6 館蔵宝塔と本圀寺との関係は、前掲『日蓮と法華の名宝―華ひらく京都町衆文化―』所収の宝塔の解説に詳しいが、以下では、史料を挙げながら、改めてその関係を確認することとする。

7 太田菊堂『大本山本圀寺略縁記』長尾日熹・埴谷詮旭 一九〇九年。

8 濱島正士『日本仏塔集成』中央公論美術出版 二〇〇一年。

9 埼玉県）真福寺宝塔（十八世紀、愛知県）、本門寺宝塔（文政十一年（二八二八）、東京都）、があるが、いずれも軒は扇垂木とする。全国の宝塔の所在地、特徴についてはつぎの文献を参照。前掲濱島『日本仏塔集成』。